33rd International Congress of Psychology
on July 21 – 26, 2024

活動報告（角南なおみ）

【日時】2024 年 7月 26 日19:00～11:00
【場所】O_2 universum, Prague, Czech Republic
【発表種別】ポスター発表
【発表題目】The Psychological Process of Teachers' Involvement in Children with Developmental Disabilities
（発達障害児とのかかわりにおける教師の心理プロセス）

【発表内容概要】
現在日本の学校現場では，発達障害を持つ児童・生徒が増加し（文部科学省，2022），通常学級では 1 クラス約 30 人の中に平均 2－3 人在籍することから，一斉指導での教師の困難感は大きくなっている。そこで，本研究では，発達障害児に対する関わりにおける教師の心理プロセスついて 1 年を通して明らかにすることを目的とする。
方法として，日本の通常学級担任教師 20 名に面接調査を行い，1 年間を通した発達障害児に対する関わりについて学期ごとに尋ね，グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Corbin & Strauss，2008）を援用し分析を行った。分析は時間的背景を考慮し，日本の学校制度にしたがい 1 年を 3 期にわけて行った。以下，教師の視点を「　」，カテゴリーを〈　〉，カテゴリーのまとまりを［　］で表す。
分析の結果，1 学期（4-7 月）には，一斉指導でもうまくいかず教師の悩みが生じ「問題行動への着目」が見られたが，途中から観察と省察により〈子ども理解〉と〈特性理解〉による［子どもの多面的理解］が行われ，「子どもの捉え方の変容」が生じていた。2 学期（9-12 月）では，「関係性への視点の広がり」が見られ発達障害児を取り巻く周囲の〈関係性を意識する〉様子が語られた。3 学期（1-3 月）に入り，「新たな価値観の創出」とともに〈自身の学びを振り返る〉内容が示された。
考察として，子どもとの問題行動に着目した状態の困難感から観察，自己省察を行いながら同時に子どもの多面的理解から関係性，自身の関わりについての検討や学びへと時間経過とともに視点と子どもの捉え方が 1 年を通して変容していることが示された。今後の課題として，本研究の知見を海外でも適用し得るかを実証していくことが求められる。

【ディスカッション概要】
日本の特別支援教育についての質問と，制度的な制約として一斉授業における教育現場での教師の具体的な困難感について質問があった。やり取りの中で，年度当初困難であっても見通しとして時間的展望を持つことの重要性を考察とともに実感することができた。